

## 鳥居清経画の草双紙（一）

—『ぎよらん』・『宇治橋姫太平兜人形』—

有働裕

近年、『近世子どもの絵本集』（岩波書店・昭和六十年）・

『初期草双紙集成江戸の絵本』（国書刊行会・昭和六十二年）

等、草双紙の翻刻や研究が盛んに行われるようになった。加えて、歌舞伎などの他の文芸との関連や、教育や児童文化などのかかわりを論じたものも見受けられるようになった。しかしながら、黄表紙の場合と異なり、黒本や青本の作者については何も明らかにしていないと言ってよい。

画工名が「鳥居清経」と記されたものの中に『西鶴織留』を用いたものがいくつかあることをかつて報告したが、このようなケースにしても、画工名のみが記されているからといって、それが作者を示すと断定することができないのが現状である。

初期の草双紙の多くは画工が作者を兼ねたと言われているが、それも「通説」以上のものではない。まして西鶴の作品が利用されているとなると、他に作者がいり板元が大きく介入していたのでは、といった助言を受けることも少なくない。事実、清経画とある『西鶴織留』利用作品は、現在まで明らかになっ

ているものがすべて鱗形屋から出されている以上、その可能性も十分に考えられるのである。<sup>(注2)</sup>

鳥居清経という浮世絵師について書き記された資料はほとんど無く、今後見つかる可能性も乏しいであろう。だとすれば、鳥居清経という人物が作者と呼べる存在であったか否かは、残された二百九十種余りの草双紙の検討によって明らかにする他はないということになる。

本稿は、以上のような問題意識に立って、鳥居清経画の草双紙を紹介しつつ考察を加えるものである。対象は未翻刻のものを中心とし、他の作者名の並記されているものも含めて扱うことにした。

(注1) 拙稿「鳥居清経と『西鶴織留』——草双紙における西鶴受容」

(昭和六十年『近世文芸』42)

(注2) 鳥居清経画の草双紙における『西鶴織留』の利用はかなり特徴的である。(注1の拙稿参照) 仮に板元の指示によるもの

であったとしても、作者自身がかなり読み込んだ上での利用であったと思われる。

## 一、『ぎよらん』

### (1) 書誌

『ぎよらん』は、『図書総目録』に、

ぎよらん 二巻 ⑧黒本・青本 ⑨鳥居清経画 ⑩日比谷加賀

と記されているもので、『日本小説書目年表』には、

○〔ぎよらん〕二 鳥居清経画 ※青本もあり (徳川時代 黒本 出版年代未詳部)

と記されている。この都立中央図書館所蔵の加賀文庫本について報告する。

本書は、『加賀文庫目録』に、

8724〔ぎよらん〕 函19—21

鳥居清経画 2冊合1 小 書名は柱によると記されている。以下、本書の体裁を示す。

①表紙 後のもの。黄土色。無地。一八・一センチ×一三・〇センチ。

②題簽 後のもの。外題は「ぎよらん」(墨書)。一一・四五センチ×二六センチ。

③本文匡郭 一五・七五センチ×一一・三五センチ。

④柱刻 上巻は「ぎよらん上」一の体裁で一、二、三、四、五。下巻は「ぎよらん下」六の体裁で六、七、八、九、十了。

⑤紙数 十丁。

⑥画作者 題簽に「鳥居清経画」、十丁表に「鳥居清経筆」とある。

⑦板元 不明。

⑧刊記 なし。ただし、十丁裏の提灯に「和九辰年」と書かれているのは明和九年壬辰(一七七二)のことと思われる、『武江年表』の安永元年(十一月二十五日改元)に魚籃観世音開帳が記されていることと本書七丁裏以降の内容を考え合わせれば、同年の刊行である可能性が高い。

⑨広告 なし。

### (2) 翻刻

※漢字についてはできる限り通行の文字に改め、仮名についてはすべて現行の字体に改めた。また、読みやすさを考え、私に読点を付した。翻字不能の箇所は□で示し、翻字が不確かであったり判読不能ではあるが前後関係から推定したりした箇所は「」で示した。以下、他の草双紙の翻刻においても同様である。

むかし、もろこしきんしやだんといふ所のうら人、すなごり

してとせいとせり。あるときりやうなく、うへけるに、一人の  
びぢよ、かたてにはごろもをもち、かたてにかごにこいを入、  
もちきたりてきよふのうへをたすけて、ごろもをあたふ。きよ  
ふども、かのびぢよのうるわしきにまよひて、これをこひした  
ふ。(二丁表)

びぢよ、このきやうを一日がほどにおぼへしものにしたがふ  
べしとて、人くにくわんをんぎやうをあたふ。人くよろこ  
び、これをおぼゆ。又、ほけきやうをいだし、これを一日かほ  
どにおぼへ給はゞしたがふべし、といふ。人みなおほゆるもの  
なし。なかに一人馬良といふもの、これをおぼゆ。やくなれば、  
しからばとて、ばらうがつまとなりぬ。

ばらう、びぢよをつまとなし、わがやへともないかへる。

(二丁裏・二丁表)

そのよ、にはかに大ねつして、天ぢよしけり。ばらうふか  
くこれをかなしみ、なきがらをけむりとなし、つどくにとふ  
らい、ついぜんくやうなしける。(二丁裏・三丁表)

そのよく日、一人のらうおうきたり。かのびぢよをとふ。そ  
れはすぎしよ、このよを去りぬといふ。らうおう、われこそは  
かのひぢよがちゝなり、そのあとをみすべし、といふ。しから  
ばとて、そのあとへともないゆく。

すなわちつれゆき、かのはいのなかをみるに、ことくくし  
やりなり。おきな、かのはいの中へ入たちければ、たちまちく  
わんをんさつたのすがたとなり、われこそはくはんをんのふん

じんなりとて、くものにりてたちさりぬ。ありかたきこいふ  
ばかりなし。(三丁裏・四丁表)

こゝにまたほうよ上人は、くわいこくし給ふおりから、なが  
さきのほとりにてふしきのれいむをこうむり、われこのどちう  
にあり、はやくほりいたし、武さしのくに三田といふ所へが  
らんをたつべし、なんじはむかしもうこしのばらうといへるぎよ  
ふのさいらいなり、とみてゆめさめぬ。

上人ほとけのおしへの所をほりかへしみるに、はたして一  
のぶつたいをゑたり。つちをあらいきよめてこれを見るに、お  
もてびぢよのごとく、右の手にかごにうをゝ入たるをさげ、左  
りのてにはごろもをもちたる、たけ八九寸のりうぞうのくわん  
をんなり。それよりもりたてまつりて、しよこくくわいこくし  
て、むさしのくにへぞおもむきける。(四丁裏・五丁表)

法よ上人くわいこくしまい、むさしのくに三田のほとりに一  
うをきづき、三田山魚藍寺となづけ、あんちし給ふ。すなわち  
ぎよらんくわんぜをんぼさつこれなり。これ、貞享年中はじめ  
てかいてうありけり。

はじめてかい張がある。

おゝ、こしいたや。やれやれくきつい人かな。ありがたい  
くわんをんさまじや。

(提灯に「開帳」の文字。)(五丁裏)

こゝに一人のらう女あり。ひとりむすめに、おらんといへる  
二八のうつくしきあり。此らう女、くわんをんをふかくしんか

うしける。何とぞむすめによきむこをとりたく、くわんをんへ  
日さんしける。あるとき、とろ／＼とまどろむうちに、くわん  
をんさつたあらわれ給ひ、なんぢわれをふかくしんずるときとく  
によつて、むすめによきむこをあたへん、又もろ／＼のあくな  
んは、まのあたりにのかすべしと、ゆめはさめけり。

われをしんずるともがらは、もろ／＼のなんはのかすべし。  
ゆめ／＼うたがふ事なかれ。(六丁表)

このきん所に平左兵衛といふさむらひ、おらんをもらひ女ほ  
うにせんと、むたいにもらいにきたる。

これ、おむすをおれに下され、おぼく。これ／＼、おむす  
／＼、おれが女ぼうになるとたんとかはいがつてやるは。はや  
くおれと一つ所にあゆべく。

あい、わたしはな、かゝさんのそくさいでこさるうちは、と  
のごはもちませぬ。くわんをんさまへふかいぐわんがけでござ  
んす。そんなことはきくもけがらはしうござんす。

平左兵衛いろ／＼いへどもおらんかてんせぬゆへ、はらにす  
へかね、おらんを一とうちときりかくれば、ふしきや、くわん  
をのめうがうよりかうめうかゝやきければ平左兵衛かたな三つ  
におれ、まなこくらみ、うつをかなはず。あやうきいのちをた  
すかりしも、ひとへにくわんをんさつたの御利やくならん。

(雲中に「魚籃観世音菩薩」の文字。)(六丁裏・七丁表)

おらんかいてうへまいるを、平左兵衛かぎいたし、大ぜいて  
のもの引ぐし、やりひつさげおつけ、なんてもぜひひつとら

へ女ぼうにせんと、ちまなこになりてかけきたる。

これはどうだ／＼。あきれてものかいわれぬ。ハ、ア、あれ  
がまことにおらんのくわんをんときたは。

ときにしうん一むらまひさかり、こうめうかゝやくとみへし  
か、大きなこい一ひきあらはれいてければ、おらんかのこい  
にひらりとりの、がわをやす／＼とこして、ぎよらん寺のかい  
てうへやす／＼とさんしける。これくわんをんのせいこんとう  
し也。たん／＼ゑの難をすくわせ給ふ。いまにはしめぬ御りせ  
うなり。(七丁裏・八丁表)

ぎよらんのくわんをんの御かげによつて、くわん次郎といふ  
大きな米どいやの二男をむこにとり、いへはんじやうしてゆ  
くすへさかへけるぞ、これもひとへにくわんをんさまの御りや  
くと、いよくしん／＼きもにめいじて、いまに日さんおこ  
たる事なし。ふうふいよくおやかう／＼に、しん／＼してく  
らしける。

まあ／＼、くわんをんさまのおかけでよいむこどのをとつて、  
めでたい／＼。

平左兵衛はいよくはらたて、ひつきやうおらんをとりにか  
せしも、あのかわんをんめがしやまひろいたゆへなり。このこ  
ひのあたはくわんをんなり。かいてうふたをとつてなけ、みち  
んにふみくたかとそつかにけるとひとしく、てんにわかにか  
きくもり、しやちはりかへつてし／＼けるは、こゝちよくこそみ  
へにける。これ、くわんをんのめうはつなり。

なむくわんせをん、たすけ給へく。やれ人ころしく。あゝくるしく。

は、あ、くわんをんさまの御はちがあたつた。

(高札に「開帳」の文字。)(八丁裏・九丁表)

浅古貞享年中にはじめてかい帳あり。又その後、享保二十年乙卯春、再度三田ぎよらん寺にてかいてうあり。またぞろこのたびかい帳せしむ。人くさんけいなし給へ。水火盜賊鬼魅病難(役)難の諸難、みな悉く消滅して、しん中の諸ぐわん、一くはたさずといふことなし。此そんぞう、唐ぶつにしてれいげんあらたなり。そのほかれいほうあまたあり。

なだいくく。

きついさんけいでござんす。けつかうなのほりかな。

鳥居清經筆

(飴屋の袋に「川口や」、暖簾に「川口屋」、幟・提灯に「魚観世音菩薩」、提灯に「開帳」の文字。)(九丁裏・十丁表)  
みゑいはこれかく。ちかふよつて、御ゑんをむすばれませう。

このほんぞんは、そもく。

(提灯に「開帳」「和九辰年」の文字。)(十丁裏)

### (3) 解説

題名の「ぎよらん」は三田山魚籃寺(住)を指すもので、この寺は『江戸砂子温故名跡誌』(享保十七年)巻五に次のように記さ

れている。

○魚籃觀音 三田 浄土宗 三田魚籃寺 当本尊は唐仏也。

当寺開山法譽上人回国の時、夢想の事あり。長崎の辺土にありしをもち来れると也。仏形、面想唐女のごとく、右の御手に籃(かご)に魚の入たるを持ち、左りに天羽衣を持。立像八九寸ばかり也。貞享年中に開帳あり。そのうちは秘仏にして常に拝する事なし。

本書の刊年推定の根拠ともなる開帳であるが、比留間尚氏の「江戸開帳年表」によれば、貞享一・享保二十・安永元年の三回が確認できる。とりわけ貞享二年の最初の開帳が話題になったことは、『武江年表』に、

浅井了意の時本尊を拝して、御縁あればこの観音を三田の山脇にて又もきよらんじはせじ。

と記されていることや、三月に市村座で「魚籃開帳金平道心」が上演された記録が『歌舞伎年表』に見えることから推察できる。開帳の時の境内の賑いは本書に描かれるところであるが、九丁裏に登場する「川口屋」は、

川口屋常が解けたと言つてやり

と『俳風柳多留拾遺』(寛政八年)三篇にある、雑司が谷鬼子母神の社前にも店を出していた飴屋のことであろう。

本書下巻の内容——おらんとくわん次郎の仲を平左兵衛が横恋慕する——は、草双紙にしばしば見られる類型的なものであると言ふことができる。しかし、魚籃観音にまつわるさまざま

な靈驗譚が伝えられていたことは、やや時代は後になるが寛政元年の『魚籃觀世音靈驗記』などからもうかがえ、本書は當時流布していた話をそのまま収めたものではないにしろ、それらを念頭に置いて作られたものであると考えてよいだろう。

さて、本書の上巻の内容であるが、これは魚籃觀音の縁起として広く知られているもので、先の『江戸砂子温故名跡誌』には次のように記されている。

もろこし金舎檀と云所の浦人、漁なく飢すべき時、一人の美女籃に魚を入レ持来りて、漁父の飢をたすけ、肌うすきものには衣をあたふ。漁父どもその美なるにまどひ、人みなこれを恋ふ。女の曰、此経を一日がほどに覚えたるにしたがふべしと、觀音経をあたふ。おの／＼それにそみて皆人これを覚ゆ。しからば是を覚えたらんにはと、法華経を授くに、覚ゆるものなく、馬郎といふもの一人おぼへたり。扱こそ約のごとく妻となりて家にゆく。その夜にはかに大熟してかの女死す。馬郎ふかくかなしみ骸を煙とす。その翌一人の老翁来り、かの女をとふ。それは過し夜死たりと云。老翁云、我はその父也、その跡を見すべしと。則つれてゆくに、灰中こと／＼舍利也。時に老翁、かの女は觀音の化身也、我また分身のぼさつなりとうせぬ。馬郎即法に入て悟る。その魚籃を持たるすがたをうつして、魚籃の觀音と号と也。

内容・表現ともに本書に極めて近く、これに先に引用した同

書の法譽上人に関する記述を合わせれば、上巻の記述をほとんど覆うことになる。本書の作者が直接『江戸砂子』を典拠として書いたか、あるいは、共通の典拠となるべきものがあつたものと考えられる。

ところで、現在魚籃寺に板木の存する『魚籃觀世音菩薩略縁起』は、卷末に「安永三年午春 東武三田山魚籃寺住持沙門善秀謹識」と記されており、本書とはほぼ同時期に刊行されたものと思われる。以下、その全文を引用する。

竊におもん見るに当寺の本尊魚籃觀世音菩薩はあがりたる世にもろこしよりわたらせ給ふ奇徳の妙製にして本州無双の靈像なり。木像にて御長つしん 謹で魚籃の縁を案するに唐元和惠宗の比ほひ金沙灘といふ所にひとりの美女の籃をさげ魚をひさぐあり見るものその容のえならぬをしたひうるはしきをきそふ女のいはく我 性仏経を悦ぶ若それにかよはれ人あらばつかへむとそれが中に馬氏なるものひとりこれをよくす依て此女をむかふ迎へおはればあへなく此世の外となりぬ馬氏その悲にたへすといへともかぎりあればそのからをおさむ日を経て後いづくともなく異僧来りて馬氏とともに塚をひらきこれをみるに靈骨皆こと／＼く金鎖となりて光をはなつ是より其国ごぞりて三宝をたふとめりとなん誠に菩薩の大悲不精の友となりつゝ、其三毒をすくひ給ふに婦女身得度者即現婦女身而為說法 とはこれなりさればはじめの金沙灘に応化まします妙相をあがめて

魚籃觀音とは申奉る愛に開山<sup>かいざん</sup>上人<sup>じやうじん</sup>の師法<sup>しほふ</sup>蒼山<sup>そうざん</sup>上人<sup>じやうじん</sup>は智徳<sup>ちとく</sup>やむごとなき聞<sup>きこ</sup>へありたま<sup>たま</sup>く、肥州<sup>ひしゅう</sup>長崎<sup>ながさき</sup>に遊化<sup>ゆうけ</sup>し給ふ時かしこなる一人<sup>ひとり</sup>の老婦<sup>らうふ</sup>久しく此靈像<sup>このれいざう</sup>につかへけるが或夜夢<sup>あるよゆめ</sup>みて大士<sup>だいし</sup>の毫光<sup>ごうかう</sup>婦人<sup>ひんじん</sup>をてらしてつげたまはく汝我<sup>なれが</sup>を念<sup>ねん</sup>ずること至<sup>いた</sup>れり今は化<sup>け</sup>を東<sup>とう</sup>に垂<sup>す</sup>んとおもふ速<sup>すみ</sup>に我<sup>が</sup>を送<sup>おく</sup>るへしと婦<sup>ふ</sup>ぬかつきて答<sup>こた</sup>へまうさく妾<sup>めかけ</sup>が家<sup>いへ</sup>もとより大士<sup>だいし</sup>を仰<sup>おほ</sup>て依怙<sup>いだい</sup>とし奉<sup>たてまつ</sup>るいかでか他<sup>た</sup>に移<sup>うつ</sup>し奉<sup>たてまつ</sup>らんと大士<sup>だいし</sup>又告<sup>まづつげ</sup>たまはく大悲<sup>だいひ</sup>のちかひむしろ汝<sup>なれ</sup>をすてめや但し東国<sup>とうこく</sup>の化縁<sup>けえん</sup>時<sup>とき</sup>至<sup>いた</sup>れり汝<sup>なれ</sup>かならず猶豫<sup>うご</sup>する事<sup>こと</sup>なかれと覺<sup>さめ</sup>て後<sup>のち</sup>なをいかならむと心<sup>こころ</sup>ひとつをさだめかねたるに法<sup>ほふ</sup>蒼<sup>そう</sup>上人<sup>じやうじん</sup>もふ思議<sup>しぎ</sup>の靈夢<sup>れいむ</sup>を蒙<sup>かか</sup>りいそぎ彼家<sup>かのいへ</sup>を尋<sup>たづ</sup>もとめねんごろに尊像<sup>そんざう</sup>を拜<sup>はい</sup>せんことをこふ老婦<sup>らうふ</sup>も尊教<sup>そんけう</sup>のむなしからざることをおもんじありのまゝにはじめおほりを語<sup>かた</sup>りあはせて靈夢<sup>れいむ</sup>のひとしきことを感じ直<sup>ちか</sup>に靈夢<sup>れいむ</sup>を法<sup>ほふ</sup>蒼<sup>そう</sup>に付<sup>た</sup>し畢<sup>はつ</sup>ぬ法<sup>ほふ</sup>蒼<sup>そう</sup>もするににおぼろけならぬことをうけよるこび則<sup>すなはち</sup>元和<sup>げんわ</sup>三年<sup>さんねん</sup>丁<sup>てい</sup>己<sup>ぎ</sup>のとし先<sup>まづ</sup>豊前<sup>ぶんぜん</sup>の国<sup>のくに</sup>中津<sup>なかつ</sup>といふ所<sup>ところ</sup>にかりに浄舍<sup>じやうしゃ</sup>をいとなみ御座<sup>おまし</sup>をかまへて魚籃<sup>ぎょらん</sup>院<sup>いん</sup>と号<sup>かう</sup>すされども大悲<sup>だいひ</sup>の御本<sup>ごほん</sup>誓<sup>ちか</sup>は東<sup>とう</sup>を化<sup>け</sup>するにありよりて又<sup>また</sup>これをおひ奉<sup>たてまつ</sup>りてはるけくも山<sup>やま</sup>をこへ海<sup>うみ</sup>をわたりて終<sup>はつ</sup>に寛永<sup>かんえい</sup>七年<sup>しちねん</sup>庚午<sup>かうぶん</sup>のとし武州<sup>ぶしゅう</sup>三田<sup>さんだ</sup>のかたはらに一字<sup>いつご</sup>を建て奉<sup>たてまつ</sup>安<sup>あん</sup>しながく天長<sup>てんぢやう</sup>地久<sup>ぢうきう</sup>国家<sup>こくが</sup>安全<sup>あんぜん</sup>を祈<sup>いの</sup>り申<sup>まう</sup>ければ感<sup>かん</sup>応<sup>おう</sup>もことにいちしるしかりけり其後<sup>そののち</sup>法<sup>ほふ</sup>蒼<sup>そう</sup>の弟子<sup>でし</sup>開山<sup>かいざん</sup> 称<sup>しょう</sup>蒼<sup>そう</sup>上人<sup>じやうじん</sup>其地<sup>そのち</sup>の所<sup>ところ</sup>をきことをなげき承<sup>しょう</sup>応<sup>おう</sup>元年<sup>げんねん</sup>壬辰<sup>みづのえ</sup>のとしまきに今の地<sup>このち</sup>に移<sup>うつ</sup>し当寺<sup>かう</sup>をこんりうして三田<sup>さんだ</sup>山<sup>さん</sup>魚籃<sup>ぎょらん</sup>寺<sup>じ</sup>とこうす是<sup>こゝ</sup>より繚<sup>りょう</sup>素<sup>そ</sup>ますく渴<sup>かつ</sup>

仰<sup>かう</sup>をいたし衆人<sup>しゆじん</sup>打<sup>うち</sup>わて歩<sup>あゆ</sup>みをはこびければ神験<sup>しんげん</sup>もいやましつゝ香煙<sup>かうえん</sup>つねに風<sup>ふう</sup>になび梵唄<sup>ぼんぱい</sup>かたく林<sup>はや</sup>にこたふ然<sup>しか</sup>れば一<sup>ひと</sup>たび此道場<sup>このどうぢやう</sup>にまうで苦薩<sup>くさつ</sup>を二<sup>ふた</sup>なく瞻礼<sup>せんれ</sup>し奉<sup>ほう</sup>る人は水火<sup>すゐくわ</sup>盜賊<sup>たうさく</sup>鬼魅<sup>きまい</sup>病難<sup>びやうなん</sup>はさらなり諸<sup>もろ</sup>の不吉祥<sup>ふききやう</sup>のこと皆<sup>みな</sup>ことごとく消<sup>く</sup>除<sup>ぞ</sup>て心中<sup>しんぢゆう</sup>の所願<sup>しよくわん</sup>はたさずということなし故<sup>ゆゑ</sup>に皇明<sup>かうめい</sup>宋<sup>そう</sup>學士<sup>がくし</sup>文憲<sup>ぶんけん</sup>公<sup>こう</sup>比尊<sup>ひそん</sup>を賛<sup>さん</sup>じていはく大士<sup>だいし</sup>之<sup>の</sup>靈<sup>れい</sup>如<sup>に</sup>月<sup>げつ</sup>在天<sup>てん</sup>不<sup>ふ</sup>分<sup>ぶん</sup>淨穢<sup>じやうたい</sup>普<sup>ふ</sup>皆<sup>みな</sup>興<sup>きよう</sup>了<sup>りやう</sup> 屢<sup>る</sup>依<sup>い</sup>者<sup>しや</sup>得<sup>とく</sup>大饒<sup>だいじやう</sup>益<sup>えき</sup>とこふ願<sup>がん</sup>は諸<sup>しよ</sup>の智愚<sup>ちぐ</sup>貴賤<sup>きけん</sup>となくかの學士<sup>がくし</sup>の贊意<sup>さんい</sup>を風味<sup>ふうみ</sup>してとこしなへに比救<sup>ひきう</sup>世<sup>せ</sup>菩薩<sup>ぼさつ</sup>魚籃<sup>ぎょらん</sup>を拈<sup>あ</sup>起<sup>き</sup>してくさぐさのあらゆるつみとかをたゞ一念<sup>いっぴん</sup>に打破<sup>たふ</sup>し給<sup>たま</sup>ふ希有<sup>きいう</sup>難思議<sup>なんしぎ</sup>の自在<sup>じざい</sup>神力<sup>しかりき</sup>を仰<sup>おほ</sup>き給<sup>たま</sup>へといふのみ

『江戸砂子』や本書の内容と類似した展開ではあるが、記述そのものにはかなりの開きがある。このような縁起は安永三年以前にも当然魚籃寺から出されていたものと思われるが、仮に安永元年の開帳以前に同様の文面のものが出されていたとするなら、作者はあえて寺から出された縁起には拠らず、『江戸砂子』に拠ったという可能性も考えられよう。推定を重ねた上での、また、極めて些細なことではあるが、草双紙作者の創作手法を探る一つの手がかりとなりはしないだろうか。

(注1) 現在は港区三田四丁目八番地三十四号にある。

(注2) 西山松之助編『江戸町人の研究』(吉川弘文館・昭和四十八年) 第二巻所収。

## 二、『宇治橋姫太平兜人形』

### (1) 書誌

『宇治橋姫太平兜人形』は、『国書総目録』に、太平兜人形たいへいかぶとにんぎやうと記されているもので、『日本小説書目年表』には、  
二巻 ①宇治橋姫、②黒本 ③丈阿作、鳥居清経画 ④明和四刊 ⑤日比谷加賀

と記されているもので、『日本小説書目年表』には、

○宇治橋姫太平兜人形 二同(八十二翁丈阿)作 富川房信ふがわふし 画 山本版 (徳川時代 黒本 明和四丁亥年出版)

と記されている。この都立中央図書館所蔵の加賀文庫本について報告する。

本書は、『加賀文庫目録』に、

8668 橋姫太平兜人形 函17—18丈阿著 鳥居清経

画 江戸丸屋小兵衛 明和4 2冊合1小

と記されている。以下、本書の体裁を示す。

①表紙 後のもの。黒色。無地。一七・八五センチ×一二・八五センチ。

②題簽 原のもの。絵題簽。『新三治のたいへいかぶとにんぎやう 板橋姫太平兜人形▲板山』と記されている。一四・三五センチ×九・七センチ。

③本文匡郭 一五・五センチ×一一・五センチ

④柱刻 上巻は ○ 丸小 かぶと人きやう 壺 の体裁で

壺、二、三、四、五。下巻は ○ 甲人形 丸小 六

の体裁で六、七、八、九、十了。

⑤紙数 十丁。

⑥画作者 十丁裏に「戲作丈阿」「鳥居清経筆」とある。

⑦板元 題簽及び柱刻から丸屋小兵衛。(通称丸小。山本氏。)

⑧刊記なし。『書本絵外題集I』(貴重本刊行会・昭和四十九年)には、同種(上下二段に分け、上段に福神等を描く)の丸小の題簽が明和期のものとして収められている。ただし、本書と全く同じ意匠のものは収められていない。

⑨広告 なし。

### (2) 翻刻

一条の院の御時、みたうの関白道家公の三男八龍丸、六十六ヶ国の山伏のつかさをゆるされ、はつ山のみね入とて、あね上朝日のまへ妹玉つる姫御見送りとして、うちの里迄御出有。さんじきにうつらせ給ふ。

けいこの武ゐには、源のよりのぶ公、藤原のほうしやう、わたなべのつな、さかたのきん時を御供にて、ひじやうをはらひぐぶし給ふ。

いもふと玉づるひめ。あね君、つなを見そめ給ふ。

はて、綱はよいおとこじや。(一丁表)

山ぶしども、

ふしぎや、とりゐのしめなはおちて、せん立の身にまとひしは、よりちか公、心にじや曲有と賞ゆ。よくさんげなさいい。

われ一たびむほんをくわだて、世をくつがへさんとせしに、あらはれて四天王か手にかゝらんとせしを、弟頼のぶが情にて山ぶしとなり、今せん立と成、八龍君にしたがひ奉れば、もはや悪心はない。諸天善神もあはれみ給へ。おのゝうたがひをはらしたもれ。

八龍丸殿。酒田のきん時、

さんけいのしゆうがのみこまぬ。どりや、きん時が一ばん、さんげのさせやうが有。そなたのうそにはきゝあきた。

つな、とゞめる。ほうしやう、

まづ／＼あらぎをやめて、君の上意をきゝ給へ。(二丁裏・

二丁表)

かくて朝日の前はつな見そめ給ひ、うつゝなき恋となり、かたゝのつぼねをもつて度／＼玉づさをおくり、くどき給ふ。

けふは色よいお返事を上られませい。よふつもつても御らうじなされませ。

くわんばく様のおひめ様がわたくしづれに恋とは、てうちに  
につりがね。殊に私には、女ほうがござります。そんなふらち  
をして、じつ方がなりませうか。

わたなべ女ほう、こわた。

いけあつかましい。ぬしの有おとこをそゝなかにして何じやいな。わたしもほうしやうがいもとじや。ふぎな事いしやると、  
おひめ様もおしやか様でもゆるしやせぬ。

それよりかたゝの局立かへり、わたなべが返事を申ければ、

朝日御前めんしよくかはり、大にいかり、局を取て引よせ、さん／＼にてうちやくし給ふ。

おのれが使のしやうがわるきに、つながしたがはぬ。ひめぐせか身の上をあかしたのんだかひもない。つなにはつまが有とや。その女も、おれが一念で取ころして見せふ。みづからが思ひのかゝつた男、いかな／＼外の女によふそはせうぞいの。

くわんばく道家公、あきれ給ふ。

気がちがふたそうな。(二丁裏・三丁表)

かくてほうしやうは、いもとむこわたなべが方へ要用の事有て来りけるか、けしからずいん火飛来り、しやうじの内へ入けるを見てふしんに思ひ、立とゞまる。

あさひのまへ一念の火。

はれ、がてんの行ぬ。此ほのふは何だ。狐火でもなし、人玉でもない。金氣にしては色があをい。どふもよめぬ。

わたなべがふうふ、保昌が来るを待。

此ほうしやうは何してゐらるゝな。りやうりのあんばいか、みなちがふ。

女ほう、こわた。

ほんにあにさんはおそい事じや。人でもやつて見よふかいな。こしもと、さを。

何やらどろ／＼となるやうで、わたしやきみがわるうこさります。(三丁裏・四丁表)

朝日のまへ、うぢ川へ入こりを取、ついにきぢよのすがたと

なり給ふ。かくてあさひごせんは、よこしまなる恋ぢにむねをこがし、いつしか心みだれ、侍女こしもとをせめさいなみ、とのゐのさふらひ共に手をおほせ、ちからも人にすぐれければ、道家公もてあつかひ給ひ、よりのぶ公へさうだん有。内をとのるにかり給ふにより、四天王のうすいの定光宇治のやかたへ相つめる。

おゝうれしや、鬼になつたそうな。

うすいの定みつ、一間あなたより姫のすがたをかぐみにうつし見て、あきれる。

はなしのやうな事だ。

こしもと共、おとろきさはぐ。

おゝ、こわいおかほや。(四丁裏・五丁表)

わたなべのつなは、夜に入しうちはしを通けるに、らいでんいなづまはためき、あさひのまへ(の)一念きぢよとなりて、つなにうらみをなす所を、ひげきをぬき、切はらへは、めいけんの光におそれ、くもゐはるかに上りけり。

それよりやしろをたて／＼、うちのはしひめといわひ、そのおんりやうをなだめとる。鳥居清〔経〕画(五丁裏)

爰に、よりのぶ公のめとの一子に、京やたくみとて、人形や有けり。かくれなきさいくの名人にて、ゆたかにてくらしけり。たくみ女ほう、おたつ、

けふもだんななどのはおるすじや。若い衆、せいだして下され。よいおちやをいれた。さあ、まづのましやれ。

こりやおきが付ました。茶くわしも下さるであらふ。手間取ども、さいくする。

〔暖簾に「京屋内匠」「御人取司」。〕(六丁表)

人形や内匠、よりちかへめさるゝ。

私之祖は、もろこし国の穆王へ人形をきざみ、さし上ました、偃師が末孫でござりまする。御あつらへの甲人形は御祝儀の物ゆへ、かりにも四二の小刀づかひをきんじ、寿命長おんと、けづり立差上まする。

寿命長をんはのぞみでない。その四二の小刀づかひか、かںようだそ。

夜がらす九郎衛門。しゝとび一さん入道。よりちかむほん。わけをいはねばきこへぬ。身は此度思ひ立事有て、より信をはじめ四王天のやつばらをてうぶくする。その人がたは、ずいぶん四二のすうを用ひて、めんていかつこう、よく似せるやうにこしらへる。八寸釘をぶちこんでてうぶくは、山伏のお手の物。本望をとげると、家を大名にしてやるぞ。せい出せ／＼。

其金はたうざのほうびじや、いたゞけ／＼。べつして、きんとき人形に四二の小刀づかひ。がつてんか。

青池蛇平太。打波岩間左衛門。(六丁裏・七丁表)

人ぎやうやたくみは、わにの口をのがれたるこゝちして、早くわが屋に帰り、一大事の人形をうけ取、もしより信様へきこへなは、悪人の同類とならん事うたがひなしと、りやうけんに感ず。女房とさうだんする。

なんと思やる。いかなるうきめにあはふもしれぬ。よいちへはおじやり申さぬか。

それ大せつ事じや。よし／＼、つねにすへたけ殿とお心あいたいわい。わたしが使にいかふから、手紙をしんぜ、よびまして、打わつてそうだんして見さしやんせぬか。

いかにも／＼、おかさまでけました。

〔帳面表紙に「萬覚帳」「大福帳」。〕

内匠、より親の悪事の思ひ立、一々かたる。

わたしもふとまいり。さて／＼こんきういたしました。

ていしゆ、おどろく事もない。綱とそうだんして、かやう／＼にいたさう。こんどが悪人の根だやしじや。そのしたしめされ。

さきほどは、お内義御太ぎ。おれがのみこんだ。

どふでも四天王様じや。

かくてうらべの季武は、人形やの手がみを見て、何事やらんと早々きたり。やうすのこらずきく。(七丁裏・八丁表)

あら、申／＼□との様の御□なされま□  
人形、どなたへもおめにかかけませぬ。まづこゝろみに、二つさし上ます。だん／＼と後からはこばせまする。

はやくできたな。どりや、ふた取て見せろ。

あお池じや平太、

できた／＼早々ひろう申そう。あんまりはやく出来たが、はやかるべしわるかるべしじやないか。はやく見せろ。

きいた／＼、人形ができて、こゝろみに二つ持てきたとや。そう／＼居間へはこべ／＼。てうぶくの道具はそろふたか。きぶさいやつらところろがさんしやうみそ、でんがくのくしざし。あゝ、むまやきりやしやかに、あと一あさかもち□思ふまゝのちいさくさ、どふもいへぬ／＼。

よりちか、よろこぶ。

〔人形の箱に、「五尺八寸季武人形」「太極上公時人形」の文字。〕(八丁裏・九丁表)

人形ばこわれとうごくと見へけるが、ふたとけはなし、酒田の公時卜部の季武、こんがう力士のごとく飛で出ル。よりちかおどろき、太刀に手をかくる所を、公ときとびかゝつてかいつかみ、やがてなはをぞかけたりける。

手下の悪〔供〕にたばかられたる口おしやと、一どにかゝるを、すへ武得たりといふまゝに取てはねちくび、人つぶてあざましかりける次〔第なり〕。

どつこい、うごくくな。

おやつかな、かぶと人ぎやうにまがさした。

かくて、頼親をはじめ一／＼になわうつて、より信のげんざんに入レにける。

あゝ、むねんや、たくみし事も、いたづらに久しいものだ。

(九丁裏・十丁表)

一張の弓のいきほひ、四夷八蛮もこと／＼く、諸かうなびく源氏の御代。諫いさめの鼓つづみ若わかむして、鳥おどろかぬ御政道。万民快楽けらく

の君が代を、あふが仰ぬものこそなかりけれ。

戯作文阿

鳥居清經筆（十丁裏）

（解説次回）

《写真版》

『ぎよらん』（加賀文庫蔵）

（1 表）

( 2 表 )

( 1 裏 )

( 3 表 )

( 2 裏 )

( 4 表)

( 3 裏)

( 5 表)

( 4 裏)

( 6 表 )

( 5 裏 )

( 7 表 )

( 6 裏 )

( 8 表)

( 7 裏)

( 9 表)

( 8 裏)

(10表)

( 9 裏)

(10裏)

《写真版》

『宇治  
橋姫太平兜人形』(加賀文庫蔵)

(1 表)

(2 表)

(1 裏)

( 3 表 )

( 2 裏 )

( 4 表 )

( 3 裏 )

( 5 表)

( 4 裏)

( 6 表)

( 5 裏)

( 7 表 )

( 6 裏 )

( 8 表 )

( 7 裏 )

(9表)

(8裏)

(10表)

(9裏)

(10裏)

〔付記〕 調査が不十分なままでの報告となり、誠に申し分けありませんが、遺漏・錯誤等について御批正御教示いただければ幸甚と存じます。

本稿を成すにあたり、資料の閲覧・翻刻を御許可下さった都立中央図書館加賀文庫の皆様、貴重な資料を提供して下さいました三田山魚籃寺の山田智之氏に深謝申し上げます。